

みんなが平等で成熟した社会へ

パリパス Pari Passou

NPO 法人 よつ葉福祉会 広報誌

2021
vol. 8

Pari Passou vol. 8 2021年10月15日発行



特集

体験的授業を通して社会的・職業的自立を目指す
～伊都中央高校・学校設定科目
「生活デザイン」の取り組み～

法人のコト「らぼとび～」の就労支援
まちのこと 九度山町の「くどやま森の童話館」へ読書の旅
まちのこえ インタビュー「いきいきルーム（橋本市）」
福祉資源のイロハ 和歌山県就労移行支援事業所連絡会について

経営理念

1. 私たちは、いかなるときでも利用者の尊厳と人権を最優先し、常にサービス提供の質の向上を目指します
2. 私たちは、常に「謙虚さ」「誠実さ」「丁寧さ」を心がけ、職員同士が共に人間的な成長ができる仲間づくりを目指します
3. 私たちは、福祉的課題を解決し、利用者の住みやすい地域づくりに貢献することを目指します

●発行：NPO 法人 よつ葉福祉会 〒649-7174 和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野 677-1 ☎0736-22-3271 <http://yotsuba-hukushikai.or.jp/>
●編集長：井端 郁人 ●制作：株式会社 Crop 〒641-0021 和歌山県和歌山市和歌浦東 4 丁目 3-19
●ご意見やお問い合わせは jimukyoku@yotsuba-hukushikai.or.jp へお寄せください

よつ葉福祉会からのお知らせ

御礼

この度、向井光作様(23歳)より、ご寄付を頂戴しました。
約10年前の向井様が中学2年生の頃、ハ

ンドボールの部活を終え、学校から自宅までの下り坂を自転車で帰宅している時、交差点で当法人の送迎車両との接触がありました。幸い外傷のみで大きな怪我はなかったですが、向井様は、事故直後すぐに車を降りて駆け寄り声掛けし、救急車を呼ぶなど迅速な対応を行った職員の行動に、すごく好感を持ったとのことでした。職員がすぐにお見舞いに伺ったことに対しても、「自分の不注意が原因で起きたことだったのに」と気になっていたそうです。

この出来事は、向井様の心に大きく残り当法人の対応と当時受け取った治療費に対し、自分が就職した初任給は、よつ葉福祉会に寄付しようと思うと考えていたとのことでした。向井様は、地元の高校卒業後、大学の工学部に進学し、「足歩行ロボット格闘競技大会(通称ロボワン)」において、自ら設計し作成したロボットが個人成績全国3位になるなど充実した生活を送られています。今まで培ってきた技術を活かし、今年4月に就職した会社でも活躍されているとのことでした。

寄付は、障害児者の方の余暇が充実されるものに使って欲しいとのことでしたので、向井様の意向に沿って大切に活用させていただきます。向井様の「ご好意に感謝をする」とともに、これを機に改めて法人全体で運転業務に対する安全意識を高めていきたいと思います。今後の向井様の「ご多幸をお祈り申し上げます。この度は本当にありがとうございました。」



ケアスクール ひと葉

各種研修の講習会を実施しています。

介護人材育成により福祉力向上に繋がることを目的とし、さまざまな講習会を実施しています。現在、離転職者等職業訓練を受ける方を募集しています。



【離転職者等職業訓練】 受講料無料 2つの資格取得が可能

募集期間 令和3年9月22日(水)～10月21日(木)

訓練期間 令和3年11月26日(金)～令和4年2月25日(金)

基本的な介護業務を身に付ける介護職員初任者研修課程と視覚障害者の方の外出移動時に支援ができる同行支援従業者養成研修一般課程の講習を実施します。修了すれば2つの資格を取得することができます(受講料は無料です)。

詳しくは、ケアスクールひと葉までお問い合わせください。TEL. 0736-22-1730

御礼 ありがとうございます!

令和2年度 赤い羽根共同募金助成金をいただきました

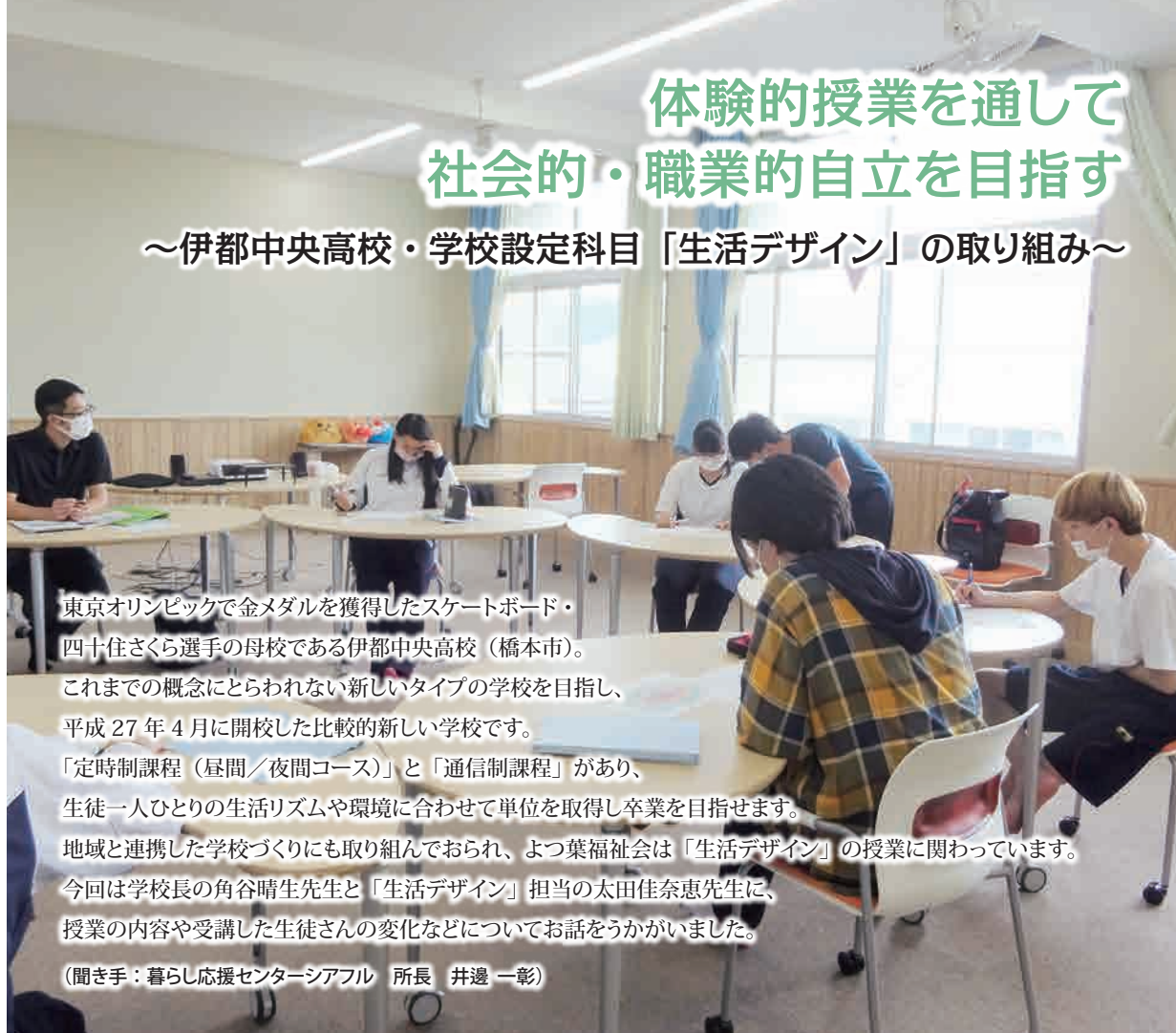
今般の新型コロナウイルス感染症により日本中が感染症対策を徹底する中ではありますが、重度の知的障害のある利用者は現状とその対策の意図を理解することが困難です。てんとう虫では、イラストや写真を使いわかりやす

く理解できるようスライドで流す取り組みを企画し、このたび、プロジェクター及びスクリーンを購入するにあたりご助成いただきました。利用者の皆さまと共に大切にに使わせていただきます。



体験的授業を通して 社会的・職業的自立を目指す

～伊都中央高校・学校設定科目「生活デザイン」の取り組み～



東京オリンピックで金メダルを獲得したスケートボード・四十住さくら選手の母校である伊都中央高校（橋本市）。

これまでの概念にとらわれない新しいタイプの学校を目指し、平成27年4月に開校した比較的新しい学校です。

「定時制課程（昼間／夜間コース）」と「通信制課程」があり、生徒一人ひとりの生活リズムや環境に合わせて単位を取得し卒業を目指せます。

地域と連携した学校づくりにも取り組んでおられ、よつ葉福祉会は「生活デザイン」の授業に関わっています。

今回は学校長の角谷晴生先生と「生活デザイン」担当の太田佳奈恵先生に、授業の内容や受講した生徒さんの変化などについてお話をうかがいました。

（聞き手：暮らし応援センターシアフル 所長 井邊 一彰）

「生活デザイン」は自立と社会参加をテーマに、集団活動を通して体験や学習を積み重ねることを目的に行われる授業です。2年間の授業を通して生徒が自分自身の課題に気づき、実践的なスキルを習得することで周囲との関係性を向上させられるよう考えられたカリキュラムが組まれています。

——平成31年度に始まった授業「生活デザイン」も3年目を迎えました。私たちも開始当初からお手伝いをさせていただいていますが、先生方の熱心な取り組みにいつも感銘を受けています。

太田 生徒たちが抱える課題の中には、一斉授業では対応しづらいものもあります。これから生徒が自立して社会で生活していけるように、私たちもできる限り丁寧をサポートしたいという思いで授業に取り組んでいます。

角谷 入学してくる生徒の中には不登校経験があったり、コミュニケーションを取ることに苦手意識があったりという生徒がいます。この授業は少人数でゆっくり関係性を築きながら進められているので、よい学びの場になっています。

——具体的にはどんな授業がありますか。

太田 1年生はコミュニケーションを取りながら行う共同製作や、生活に必要な力

を知るマナープランゲーム、自分について理解を深める「元氣ブック」作りなど。2年生は校外へ出てマップを作ったり、ライフステージに関する知識を学んだりなどです。対人関係の築き方や身の周りのことを知って社会に関わっていく力、状況を理解してストレス解消ができるようになる力などが身に付くようなプログラムを組んでいます。

——高校の取り組みとしては珍しいのではないですか。

角谷 「生活デザイン」は、個々に応じたアプローチの仕方が必要になってくる場面があるので、さまざまな視点も取り入れながら生徒たちを指導していくことが大切だと思っています。本校では地域と一体となつて特色ある学校づくりを進めていて、この授業以外にも地域の皆さんの協力を得ながら取り組んでいるものもあります。

——授業のベースは和歌山県が主導して作成した「どんまいプログラム」地域発達障害サポートプログラム」です。どの点が授業に適していると思われましたか。

太田 物事の捉え方に関する部分ですね。多方向から物事を見て考え方の幅を広げ、



自分の感情のコントロールができるようになれば社会に出たときに役立つのではないかと。高校の授業にするためアレンジが必要でしたし、毎年授業内容も見直し、改善しています。その際にはよつ葉福祉会さんのご協力をいただき感謝しています。

——受講する生徒さんの様子はいかがですか。

太田 授業への出席がなかなかできない生徒もいるのですが、「生活デザイン」はいつも楽しみに出席してくれています。他の選択生と一緒に作品を作り上げていく中で安心して自分を出せるようになったようです。この授業が高校での集団生活に適応する一つのきっかけになっています。学校生活の始まりにこの授業を受けてもらえて本当に良かったと思っています。他にも授業を通してイライラした気持ちをコントロールできるようになった生徒や他者を気遣えるようになった生徒など、変化を見せてくれています。

——春に組み込んだ共同製作が活きたのですね。

太田 そうですね。今年は張り子をみんなで作りましたが、作りながら仲良くなることができたので、自分のことをわかってくれる存在が学校にいるという安心感につながっているのだと思います。

——製作やゲームは達成感を持ちやすく、成功体験になります。その積み重ねはもちろん、授業の中で先生方が生徒さんの表現していることや発言をしつかり拾い、丁寧に関わっておられることも素晴らしいと思います。

太田 いつも生徒の表現や表情の変化など、反応をみながら進めるような心がけています。前向きな発言を拾ったり、やりたくなるよう伝え方も工夫したり。やはりまずは楽しく授業を受けてもらいたいので、生徒が理解しやすい授業作りに努力しています。

角谷 私も担当の先生方はとてもよく生徒を見て、上手にサポートしてくれていると思っています。これから高校では、新学習指導要領のもとで、授業の中で「個別最適な学び」をどう実現していくかが問われるようになっていきます。教師は、これまでの一斉授業から個に応じたきめ

——先生と生徒、生徒同士など相互のやり取りで信頼関係を築く経験を持つことは、その子にとって将来よい影響になりますね。人を信用できると社会で生活しやすいです。

太田 そうですね。初めは人との距離感をつかむのが苦手だった子も、授業を通して一緒に過ごした生徒に対して気遣いを見せられるようになりました。社会性が身に付いたのか、言動も穏やかになっていきました。他にも毎年さまざまな変化を見せてくれる生徒がいます。この授業だけが影響を与えたわけではないと思いますが、毎日楽しいと学校に来てくれる姿をみると、成長が感じられ、とてもうれしいです。

——相手を尊重しながら振る舞うことができるのは、精神的自立ができるようになった証です。先生を含め、参加している全員が本音で接している状況は生徒さんに響いていると思います。今後につ

Profile

和歌山県立伊都中央高等学校
平成27年開校。「夢の実現に向って挑戦する志をもち、多様な学びや出会いを通して、自らの未来を切り拓こうとする意欲や態度を育み、社会に貢献しようとする人間を育成する」を学校目標とし、学び方、時間割、修業年限などは一人ひとりが自分に合わせて選ぶことができる。



（写真左から）太田 佳奈恵先生
角谷 晴生 学校長
暮らし応援センターシアフル 所長 井邊 一彰

角谷 地域と連携した学校づくりをこれからも進めていきます。この授業以外にも介護職員初任者研修や地域へのインターンシップなど、地域の方々の力をお借りしています。将来、子どもたちは地域で生活していきますので、その中で自立し、夢を実現していけるよう私たちも一人ひとりに応じたきめ細やかなサポートを続けていきます。

太田 よつ葉福祉会さんからいただくアドバイスを元に、常にブラッシュアップを続けながらその時々課題に応じたプログラムを組んでいきたいと思っています。生徒が学校へ行くことを迷った時に、「今日は生活デザインがあるから行ってみようかな」と思ってもらえれば嬉しいです。



「らぼとび～」の就労支援

活躍の場を地域に！ 施設外就労の取り組み

らぼとび～ 所長 藤本 照子

よつ葉福祉会の就労支援は、地域の中で誰もが当たり前のように働き、暮らし、しあわせを実感できる社会を目指し活動しています。その過程で生活の幅や質を高め、所得を向上させることを目的に、らぼとび～では昨年度、施設外就労先の開拓に力を入れ、新たに協力いただける 2 つの企業様から仕事を受託することができました。

令和 3 年度障害福祉サービス等報酬改定により、就労継続支援 B 型事業の報酬体系が変更され、従来の「月の平均工賃額による基本報酬」と、新たに創設された「就労や生産活動等への参加を基準とした基本報酬」のどちらかを選択する制度となりました。

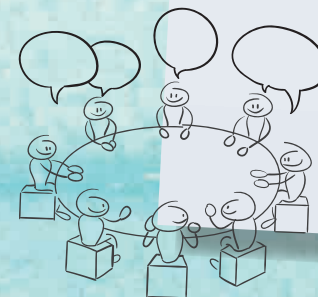
利用者が地域で活躍できる場、活動の場を広げることを目的に創設された「就労や生産活動等への参加を基準とした基本報酬」は、「地域に出かけて取り組むこと」、「地域課題の解決のために取り組むこと」、「地域の方々と取り組むこと」等「地域住民と協働」で活動することを目指したものです。



わたしたちの
取り組み

法人の コト

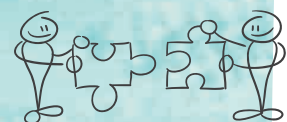
よつ葉福祉会は地域で誰もが当たり前のように働き、暮らせる社会の実現を目指しています。
施設外就労先の開拓にも力を入れ、
利用者の活躍の場を地域に移す
取り組みを行っています。
今回は「らぼとび～」の就労支援についてご紹介します。



らぼとび～では従来から、利用者の活躍の場を地域に移し、その活動の場を広げることができるように取り組んできました。例えば、特別養護老人ホーム聖アンナの家では、施設で生活される利用者の方の居室におじゃまし、シーツ交換や清掃の仕事をさせていただいています。入居者や職員の方から「ありがとう」「助かっています」といった労いの言葉をいただき、「人の役に立ち、感謝をされる」経験がその人の成長や生きがいに直結していることを実感させられます。

時代の変化とともに制度が変わっても、「地域の中で働き・暮らす」といった根幹はこれまで通りの取り組みを変えることはありません。

地域（企業）が元気になれるように、人材不足などの企業の困りごとを解決できるように、そして、利用者の皆さんが地域で働くことにより、社会の中での役割と居場所を得ることができ、自分自身の成長や生きがいにつながる働き方ができるように取り組んでいきたいと考えています。私たちと地域がお互いに尊重し合い、信頼関係を築いていくことで win-win の良好な関係を広げていきたいです。



福祉資源の イロハ

今回は先日設立された 「和歌山県就労移行支援事業所連絡会」の 活動を取り上げます。

就労移行支援事業は、就労支援サービスのひとつです。
一般企業への就職を目指す障害のある方が、就職へ向けたサポートを受けることができます。当法人は就労移行支援が、福祉サービスとしてよりよい発展をするために、同連絡会の発起団体として協力しました。

ソプラス 井端所長が 和歌山県就労移行支援事業所連絡会設立の経緯 についてご説明します

令和3年8月26日に、「和歌山県就労移行支援事業所連絡会」(会長：中野喜代子)が設立しました。当法人はこの連絡会の設立に準備段階から協力し、今後も連絡会が発展できるよう活動していきます。

平成18年に障害者自立支援法が施行され、就労支援の抜本的強化として就労移行支援事業が創設されました。それから15年目を迎えている今、社会や制度の変化とともに様々な課題が生じています。

和歌山県において、就労移行支援事業所数や定員数は創設当初より増加していましたが、平成28年度以降減少してきています。一般就労への移行者数は、全国的には増加傾向にあるものの、和歌山県においては創設当初より、年間30~40名程度で推移しています。全国的には、一般就労への移行率が20%以上の事業所の割合が増加する一方、移行率が0%の事業所の割合は約30%強で創設当初より推移しており、移行率の二極化が進んでいると言われています。

こうした現状の要因として、就職者が出ると収入が減り、就職者が出た後に新規利用者が入るまでに相当な期間を要すること、または就職者数より新規

利用者が少ない
など、不安定な
運営であること
が考えられます。
それらの課題が

解決できないために、専門性の高い人材を配置することができず支援の質が上がらないなど、人材確保・人材育成も慢性的な課題となっています。

就労移行支援の事業所数の減少や支援の質の低調などの課題は、安定的な運営が保障されていない制度設計の厳しさも一つの要因ではないかと考えられます。一方で、働きたいと希望する障害のある人に対し、就労移行支援事業所としてのアセスメントや準備訓練、実習先や雇用先の開拓、職場への定着支援といった適切な就労支援サービスが提供できていないことも事実としてあろうかと思えます。

こうした現状を踏まえ、和歌山県の就労移行支援事業所が、適切な就労移行支援サービスを提供するとともに、和歌山県における就労移行支援のあり方や施策について提案し、障害のある人の一般就労及び継続就労を促進させることを目的に「和歌山県就労移行支援事業所連絡会」が設立されました。

和歌山県就労移行支援事業所連絡会の主な活動

1
就労移行支援事業所の
情報交換と
ネットワークの構築

2
就労移行支援事業所の
研修会の実施

3
和歌山県における
就労移行支援のあり方や
施策についての提案

お問い合わせ 就労移行支援事業所連絡会事務局(ソプラス内) 電話：0736-26-7281 担当：七釜子 真紀

まちのこと

⑨九度山町の “くどやま森の童話館”へ読書の旅



くどやま森の童話館は急な坂を上り切った頂上近くに現れます。豊かな自然と森に囲まれていました。「こんな山の中にこんな大きな建物があるなんて。」と寺田さんは感動していました。カラフルな看板が出迎えてくれます。童話館の中に入ると、優しい管理人さんが「どうぞ、お入りください。」と中を案内して下さいました。中には、二つの教室があり、一つの教室には、たくさんさんの絵本が綺麗に並べられてありました。寺田さんは「知ってる絵本がたくさんある。」と嬉しそうにしていました。もう一つの教室には、絵本の読み聞かせができる広いスペースがあり、寺田さんは、ふわふわのラグマットの上で絵本を読んでいた。「からすのパン屋さん」「100万回生きたねこ」を読み切った後、あらすじを教えてくださいました。離れの部屋では、アナログのレコーダーを聴けます。管理人さんが、クラシッ

自然に囲まれた木造校舎で、てんとう虫利用者さんと絵本や音楽にゆったり親しむ時間。平成18年以降休校となっていた旧久保小学校が、「くどやま森の童話館」として生まれ変わりました。てんとう虫を利用している寺田衣里さん。趣味は読書で、絵本や小説を読むのが大好きです。くどやま森の童話館の情報を知り、さっそく一緒に行ってみることにしました。

■DATA

くどやま森の童話館

- 住所
和歌山県伊都郡
九度山町北又 379 番地
- 開館時間
午前9時～午後4時30分
- 開館日
4/1～11/30までの土曜日／日曜日および国民の休日
4/28～5/8までの平日
7/21～8/31までの木曜日および金曜日



ク音楽をかけてくれました。寺田さんはソファーに座って目をつぶって聞いていました。外には運動場があり、バスケットゴール、うんてい、朝礼台がありました。昔小学校だったこの建物の当時の様子を、管理人さんに聞いてみました。「100人位の児童がいたけれど少しずつ数が減って。学校火災があった時、在校生が1人いたので、元通り復元しました。その後、在校生がいなくなり休校に。綺麗な建物なので地元の方の理解で、くどやま森の童話館として復活しました。今後も維持されることを願っています。」と教えてくださいました。寺田さんはお礼を言いつて、くどやま森の童話館をあとにしました。「またきたいなあ。」と笑顔で話していました。

Q 今後の展望について

Q 障害のある方のいきいきルーム利用日を設けた理由は?

Q 担当セラピスト(PT配置)の役割について

Q 利用されるニーズは?

Q 利用方法について

Q 事業の目的について

A 引き続き市民の健康寿命の延伸に努めます。さらに近年では障害のある方の利用も多くなっているため、委託業者との調整も行い、だれもが気軽に足を運べる施設としてご利用をいただけるよう努めていきます。また、運動のみの場だけでなく、他者との交流の場として利用していただいても良いです。いきいきルームを利用することで、地域のコミュニティに溶け込んでいく人が増えていく、そんな役割の場になっていく事を目指していきたいです。

A 相談が主となります。治療という事ではなく、痛みの軽減や原因を突き止めて利用者さんにあった運動方法を考えます。身体の状態を評価し、利用者さんと共に改善へ向かっていきます。

A 障害のため運動器具の利用に時間がかかってしまい、他の利用者に気を遣っている方もおられたため、障害者の方が気兼ねなくのびのびと運動ができるようにするためです。

A 60~70代の方が大半ですが、30~50代や各年代の方も利用されます。障害のある方も利用されています。

A 完全予約制です。なお、現在コロナウイルス感染症感染予防の観点から利用人数等の制限を行っています。今後より多くの市民が利用できるよう、利用時間帯を工夫するなど委託業者との調整を行います。

A 運動器具を使用した生活習慣病予防及び一般介護予防事業を実施し、市民の健康寿命の延伸を図るための施設として開設しています。高齢者の方には介護保険を利用せずとも元気にいきいきとした日常を送れることを目指しています。障害のある方に対しても様々な運動器具を用意していますので、個々に合った運動を行い、健康に過ごせるように活用していただきたいと思います。

まちのこと

施設にインタビュー！ いきいきルーム(橋本市)

橋本市保健福祉センター1階にある「いきいきルーム」では、一人ひとりのニーズに合わせたトレーニングができます。障害のある方のみ利用できる日を設け、多くの方が利用されているため、利用方法等について詳しくお話をうかがいました。

